

水俣病になっても

生きててよかった。

楽しいことをいっぱいして。

そういう運動も

あっていいんじゃないか。

©Komori Hanuka

上映作品

春、

阿賀の岸边にて / おあがりんちょ

Day 1

10/23 金 13:30 開場
14:00 上映

@ 熊本市現代美術館アートロフト
----- 熊本市中央区上通町2番3号

Day 2

10/24 土 9:30 開場
10:00 上映

@ 水俣病情報センター内 講堂
----- 水俣市明神町55-10

- 両日とも2作品を連続上映。上映時間は約120分を予定しています。入場無料です！
- 24日夜には水俣で交流会を予定しています。詳細は下記、鐘ヶ江までおたずねください。

お問合せ

090-1976-5524 (鐘ヶ江)

✉ tsuzumikot@yahoo.co.jp

主催：チッソ水俣病患者連盟 鐘ヶ江鼓子 共催：公益財団法人熊本市美術文化振興財団
本事業は水俣病公式確認70年地域提案事業補助金を活用して実施しています

つながる

かたる

新潟と水俣

入場無料

小森はるか監督作品
特別上映会

水俣病って、なんだろう？
映画を観て語り合いませんか。
監督と出演者のゲスト参加あり、
上映後のアフタートークもあり。
あふれんばかりの旗野節を、
ぜひご体感ください。



阿賀に生きる人々と
阿賀の魅力とともに、
人間が生み出した病を
未来に伝える
冥土のみやげ
という名の文化運動

新潟水俣病の患者運動の支援者である旗野秀人さんは、映画『阿賀に生きる』(1992年/佐藤真監督)の発起人。現在も「冥土のみやげ」企画という“文化運動”を一人で続ける旗野さんに惹かれた作者は、阿賀野川流域へ移住し撮影を続けた。本当の支援とは何か。「死」を別れとはしない、そばに居続ける人の50年の歩みを、映し出す。

予告編は
こちらから!



同時上映!

おあがりんちよ 【2026年/56分/小森はるか】

新潟県阿賀野市に住む中村美奈子さんの日々を記録している。美奈子さんは『春、阿賀の岸辺にて』の主人公・旗野秀人さんの妹。母の生き方を受け継ぐように、畑を耕し、本を読み、干し柿をつくる。暮らしの中で抵抗を続ける身体を見つめた。



プロフィール

監督より、ご挨拶 Statement

東日本大震災後に『阿賀に生きる』を観て影響を受けた私は、2013年より阿賀の追悼集会へ参加するようになり、この会を主催してきた旗野さんに惹かれ、カメラを向け始めました。次第に阿賀野川流域の風土や、新潟水俣病が現在どのように語られているかを知りたいと、そんな思いで2022年より新潟へ移住し撮影を継続してきました。旗野さんが支援してきた患者たちは、その多くが水俣病と認定されず、地域の中でも差別を受けてきた人々です。被害者であることを認められずに旅立っていく人々を見送りながら、「水俣病になっても生きていてよかった」と言ってもらえるよう、旗野さんは本当の支援とは何かを模索し続けてきた人でした。あの世に逝ってから付き合いをやめない、死を別れとはしないのです。

追悼集会の名称である「阿賀の岸辺にて」は、旗野さんが新潟水俣病に関わり始めた頃、ガリ版刷りで最初に作った聞き書き集『あがの岸辺にて』と同じタイトルです。文化運動の原点と、今も途絶えない弔いの場を結ぶこの言葉は、地域に根差しながら患者一人ひとりに寄り添ってきた旗野さんの50年の時間を表しているものだと思います。また私には、阿賀野川のほとりに集った人たちが再会の約束をする言葉のようにも感じられ、作品のタイトルに拝借しました。春を迎える度、この世からもあの世からも人が阿賀へ集まってくる。この賑やかさの中でこそ、記憶が受け継がれている現実希望を抱きながら撮り続けた映画です。



監督：
小森はるか

映像作家。1989年静岡生まれ。瀬尾夏美(画家・作家)とのアートユニットやNOOK(のおく)のメンバーとしても活動。2011年以降、岩手県陸前高田市や東北各地で、人々の語りと風景の記録から作品制作を続ける。映画『阿賀に生きる』に影響を受け、2022～2026年まで新潟市に住みながら制作を行う。現在はさいたま市在住。主な作品に《息の跡》(2016年)、《空に聞く》(2018年)、《二重のまち／交代地のうたを編む》(2019年／瀬尾夏美と共同監督)など。《春、阿賀の岸辺にて》(2025年)は恵比寿映像祭2025第2回コミッション・プロジェクト特別賞受賞。



出演：
旗野秀人

1950年、阿賀野市(旧安田町)生まれ。71年より家業の大工を継ぎながら、新潟水俣病未認定患者の運動に取り組む。ドキュメンタリー映画『阿賀に生きる』製作発起人。映像作品や絵本・CDアルバムの製作、水俣、阿賀野市千唐仁、渡良瀬、鹿瀬のお地藏さんを建立するなど、水俣病問題を文化運動として展開しながら今日に至る。新潟県立環境と人間のふれあい館運営委員、新潟水俣病安田患者の会事務局、冥土のみやげ企画、阿賀に生きるファン倶楽部事務局、元(株)旗野住研取締役社長。